様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６４９

研究課題名（和文）成人学習論に基づく「アジアの日本語教師研修システム」の構築

研究課題名（英文）Build a Japanese-language teacher training system for Asia based on andragogy

研究代表者
池田　広子（IKEDA, Hiroko）

目白大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０４５２０３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「成人学習論に基づくアジアの日本語教師研修システムの構築」を目的とし、同教師研修を日中両国で実施し、評価・改善を繰り返しながら、①参加者教師の学びと②運営者側の学びを長期的に分析した。分析の結果、まず、日本国内の研修の場合、ファシリテーターやコーディネーターは、役割の認識をもつことや柔軟なデザインが必要であること、フィールドが異なっても通底する特徴があることを認識していた。また、他者の実践によってエンパワーメントされることも確認された。一方、日中協働による海外研修では、日中の文脈を越えて重層的な学びが確認された。今後は継続的に参加する教師の学びを追究したい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
(1)日本語教師教育における新たな研修の可能性を国内・海外で実践し、その可能性を示した。これまでの研究の中心は「教師の成長」の考え方にとどまっていたが、実践コミュニティや成人学習論をベースに加えることで、①教師の継続的な省察力を支える、③運営側のエンパワーメントと養成への道筋ができた。これにより、関連領域のリーダー育成や組織学習論をベースにしたビジネス研修、社会教育学分野に応用ができる。
(2)新しいタイプの研修を日中協働で行ったことで、①教師の質の向上、②コミュニティの構築がされた。ここで得た知見をASEAN地域にも応用し、アジア全体の日本語教師の力量形成に繋げていくことができる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to “build a Japanese-language teacher training system for Asia based on andragogy” by performing a long-term analysis of [1] learning by teachers who participate in these programs and [2] learning by program managers through conducting, evaluating, and improving identical teacher training in Japan and China. The results indicate that, in the case of training in Japan, facilitators or coordinators are conscious of their roles and require flexible design; even in different areas, there are underlying characteristics of learning. It was confirmed that empowerment occurs through practice by others. It was also verified that overseas training conducted through cooperation between China and Japan involves multi-layered learning that transcends the contexts of either country. In the future, we aim to continue to thoroughly investigate learning by participating teachers.

研究分野：日本語教育

キーワード：成人学習論　教師コミュニティ　省察的実践者　意識変容の学習　ラウンドテーブル　実践の理論　協働省察　実践コミュニティ

１．研究開始当初の背景

グローバル化に伴い日本語教員をとりまく環境は、一層複雑化してきている。また、海外においては日本語教材不足、教師研修のあり方への対応等、検討すべきことが多い。
日本語教育における教師教育研究は、1990 年以降に岡崎・岡崎(1997)によって取り入れられた「省察的実践家」(Schön、1983)、「教師の成長」、「内省モデル」(Wallace 、1991)、「アクションリサーチ」(横溝、2000)という考え方が中心に展開されてきた。また、日本語教師研修では、新たな知識や理論の獲得を目指す講座やワークショップ等が多く行われている。

しかし、①成人学習者の特性を生かした教師の支援や②現場の実践を協働で省察・再解釈しながらコミュニティーを培う研修、すなわち、教員のエンパワーメントに着目し、実践から学び合う研修は国内外でほとんど実施されてこなかった。申請者は、教師が成人であることに着目し、「成人の特性（価値観や経験）を生かし、実践の協働的省察力をつける研修（ラウンドテーブル型研修）」を国内の日本語教員を対象に継続的にデザインし、実施してきた。この研修の成果は,すでに公表されており､日本語教師の本質的な向上と自己実現に寄与するのみならず、教師コミュニティーの構築、社会文化的アプローチの向上をもたらすものとして評価された。しかし、その国の現状によって日本語教育のニーズ、教師観や学習観が異なることが指摘されている。そのため実証的な研究が国内外で必要であると考える。

２．研究の目的

本研究では、日中で実施してきた、「成人の特性を生かし、実践の協働的省察力をつける研修（ラウンドテーブル型研修）」プログラムを継続し、参加者教師の認識の変化と運営側の学びを明らかにする。その上で、日中で得られた知見を比較し、本研修とシステムの可能性を検討する。具体的には、以下 3 点である。

(1)日本において「成人教育の視点を取り入れた教師研修」を実施し、参加者教師の学びを明らかにする。また、運営側を対象に意識変容の学びや認識の変容を縦断的に追究する。
(2)中国において「成人教育の視点を取り入れた教師研修」を実施し、参加者教師の学びを明らかにする。また、運営側を対象に意識変容の学びや認識の変容を縦断的に追究する。
(3)日中で得られた結果を比較検討し、相違点と共通点を特定する。(1)、(2)、(3)の知見から、本研修とシステム構築の可能性を検討する。

３．研究の方法

教師研修の実施およびデータ収集は、参加者および運営者に協力を求め、以下の項目について継続的に資料を収集し、分析を行う。

（１）データの収集

①国内の教師研修では、当該研修（年に１回）を継続的に実施し、研修に関する資料及び研修後の反省会（運営者のみ参加）の談話データを収集する。
②研修後に研修参加者に半構造化インタビューを行い、M-GTA を援用し、研修に参加する中での気づきや学び、意識の変容を探る。また、成人学習論の観点から学びを特徴づけ、考察する。
③中国の教師研修（年に１回）を継続的に実施し、研修に関する資料及び研修後のアドバイスセッション（運営者のみ参加）の談話データを収集する。
④研修後に研修参加者に半構造化インタビューを行い、M-GTA を援用し、参加する中での気づきや学び、意識の変容を探る。また、成人学習論の観点から学びを特徴づけ、考察する。
⑤日中の運営者および参加者の学びについて比較し、共通点や相違点を特定する。

（２）体制

本研究は日中の運営者が相互に連携を図りながら、日中の参加者教師の支援を進めながら、そこで得たデータをもとに研究を進める。

４．研究成果

本研究の成果を、「2.研究の目的」の項目にあげた 3 つの研究課題に沿って示す。

（１）日本において「成人教育の視点を取り入れた教師研修」を実施し、参加者教師の学びを明らかにする。また､運営側を対象に意識変容の学びや認識の変容を縦断的に追究する。

日本で当該研究を実施した場合の運営者側の学びと参加者教師の学びは、以下の 2 点の学びがあることがわかった。第一は、運営側（コーディネーターおよびファシリテーター）の学びについてである。ここでは、①多様化した各教育現場に通底する特徴への共感, ②ファシリテ

ーターの役割の再認識，③教師が置かれている状況を考慮した柔軟なデザインの必要性，④省察を深めるための聴き手の役割を認識，⑤他者の実践によって自分の実践が支えられていることへの気づき，⑥自身の教育活動の経験の広がり(内的)が確認された。特にファシリテーターにおいては、⑤と⑥が顕著に確認された。このような点から、運営者同士は参加者から、運営者同士から継続的に学びを得ていたことが分かった。第二は、運営者は主体性をもって取り組むことが重要である。参加者教師の学びについては、省察的な力がついていくことが確認されたが、今後、継続的に追究していく必要がある。

（２）中国において「成人教育の視点を取り入れた教師研修」を実施し、参加者教師の学びを明らかにする。また、運営側を対象に意識変容の学びや認識の変容を縦断的に追究する。

中国で当該研究を実施した場合の運営者側の学びは、三者（日・中のコーディネーター、双方をつなげる仲介者）の意思疎通が重要であるという認識が見られたことである。具体的には，(1)日本のコーディネーターの柔軟な姿勢，中国のコーディネーターの情報収集と提供，仲介者の双方の意思疎通を図るための状況説明が不可欠である。(2)協働運営により役割の固定化が避けられたという気づきが見られた。例えば、多様な役割を体験し，多様な角度からふり返り活動に対する理解が深まったこと等である。(3)国内外を視野に入れた教育実践の共有に対する認識が深まったことがわかった。複数の文脈の教室実践への理解と教師に対するエンパワーメントを通して重層的な学びが実現されたことである。

以上のことから，日中協働による海外のラウンドテーブル型研修は、運営者にとって日中の文脈を越えて重層的な学びを支えるものであること，また，これらは日本国内の研修を運営（池田 2015,半原 2015）する際には見られない学びの醸成であることを明らかにした。参加者の学びについては、上海ラウンドテーブルに継続して参加している教師を対象にインタビューを行い、分析した。今後、精緻化した結果を発信していきたい。

（３）日中で得られた結果を比較検討し、相違点と共通点を特定する。(1)、(2)、(3)の知見から、本研修とシステム構築の可能性を検討する。

運営者の学びは(1)と(2)では異なっていた。(1)は運営のスキルやファシリテーターやコーディネーターの学びに関することが確認されたが、(2)は日中協働で行う研修であるため、まずは互いの文脈や置かれている立場を柔軟に理解し合い、共に妥協点を見つけながら進んでいくことも確認されており、複層的であった。

今後、研究面の課題としては、日中両国以外の文脈で実施し、そこでの学びを検討していくことが重要である。特に日本語学習者が増加している東南アジアで当該研修を行った場合、運営者や参加者の学びを縦断的に捉え、特徴づけていくことが重要であることが示唆された。

＜引用文献＞

(1)池田広子・宇津木奈美子・朱桂栄・半原芳子(2015)「成人学習論に基づくラウンドテーブル型教師研修における運営者の学び」、『2015 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、233-234

(2)岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育実習　理論と実践』アルク

(3)半原芳子・池田広子・宇津木奈美子・朱桂栄(2015)「教師の成長プロセスを支えるラウンドテーブル型教師研修におけるファシリテーターの学び」、『2015 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、359-360

(4)横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクションリサーチ』、凡人社

(5)Schön,D.A.(1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*.Basic Books

(6)Wallace, M. (1991) *Training Foreign Language Teachers: A Reflective Approach.* Cambridge University Press

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２本）

①池田広子、成人学習論に基づくラウンドテーブル型日本語教師研修の可能性―運営側の学びの考察、日語教育与日本学 2016、華東理工大学出版社有限公司、第 8 号、2016、106-113、査読有

②池田広子、成人学習論に基づくラウンドテーブル型日本語教師研修の可能性、ことばと文字、日本のローマ社、6 号、2016、153-160、依頼原稿、査読無

〔学会発表〕（計５本）

①池田広子、ラウンドテーブル型教師研修を通した教師コミュニティの広がりと運営者側の成

長、日本語教育国際大会 ICJLE 2016 インドネシア・バリ、2016 年 9 月
②池田広子、成人学習論に基づくラウンドテーブル型日本語教師研修における継続的参加者の学び、カナダ日本語教育振興会年次大会 JALE2016CAJLE Annual Conference 2016、 2016 年 8 月
③朱桂栄・池田広子・宇津木奈美子・半原芳子、日中協働運営による海外のラウンドテーブル型教師研修におけるコーディネーターの学び、日本語教育学会春季大会,目白大学, 2016 年 5 月
④半原芳子・池田広子・宇津木奈美子・朱桂栄、教師の成長プロセスを支えるラウンドテーブル型教師研修におけるファシリテーターの学び、日本語教育学会秋季大会、沖縄国際大学、2015 年 10 月
⑤池田広子・宇津木奈美子・朱桂栄・半原芳子、成人学習論に基づくラウンドテーブル型教師研修における運営者の学び、日本語教育学会春季大会、武蔵野大学、2015 年 5 月

〔図書〕（計１件）
①池田広子・朱桂栄、実践のふり返りによる日本語教師教育―成人学習論の視点から、鳳書房、2017、1～178

[その他]
○ホームページの開設
http://manabireflection.web.fc2.com/
学びを培う教師コミュニティ研究会

○研究会「学びを培う教師コミュニティ研究会」の発足
運営側主要メンバー12 名

○教師研修の実施
①2018 冬上海ラウンドテーブル「実践のプロセスを協働でふり返る－語る・聴くから省察へ」教師研修の実施,学びを培う教師コミュニティ研究会と華東師範大学の共催, 2018 年 12 月

②研修会の実施「成人学習を読み解く 輪読会― M.ノールズ著『成人教育の現代的実践』(2002)を読み解く」2018 年 9 月

③2017 年秋上海ラウンドテーブル「実践のプロセスを協働でふり返る－語る・聴くから省察へ」教師研修の実施,学びを培う教師コミュニティ研究会と華東師範大学の共催, 2017 年 11 月

④2017 春ラウンドテーブル　教師研修「実践のプロセスを協働でふり返る－語る・聴くから省察へ」 を実施, 学びを培う教師コミュニティ研究会, 玉川大学、2017 年 3 月

⑤2016 秋上海ラウンドテーブル「実践のプロセスを協働でふり返る－語る・聴くから省察へ」教師研修の実施,学びを培う教師コミュニティ研究会と華東師範大学の共催, 2016 年 10 月

⑥2015 冬北京ラウンドテーブル教師研修「実践のプロセスを協働でふり返る－語る・聴くから省察へ」を実施,学びを培う教師コミュニティ研究会と北京日本語教師研究会, 2015 年 12 月

６．研究組織
（１）研究分担者氏名：中村　香
ローマ字氏名：NAKAMURA, Kaori
所属研究機関名：玉川大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）:20436728

研究分担者氏名：宇津木奈美子
ローマ字氏名：UTSUKI, Namiko
所属研究機関名：帝京大学
部局名：帝京スタディアブロードセンター日本語予備教育課程
職名：講師
研究者番号（8 桁）：90625287

研究分担者氏名：半原芳子
ローマ字氏名：HANBARA, Yoshiko
所属研究機関名：福井大学大学院

部局名：学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成・院）
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00637811

（２）研究協力者
研究協力者氏名：朱桂栄
ローマ字氏名：Zhu Guirong

研究協力者氏名：尹松
ローマ字氏名：Yin song

研究協力者氏名：曹大峰
ローマ字氏名：Cao dafeng

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。